



船場(せんば)をご存じ?

偉大なる船場

「船場」と一口に言っても、時代によってそのエリアは変わってきます。その変化は大坂の発展そのものといえます。

船場の成り立ち

始まりは「太閤さん」から
「船場ってどこ?」と聞いても、すぐに「ここからここまで!」と答えられる人は少ないでしょう。そもそも「センバ」と読めない人も増えていくと聞きます。

船場をつくりはじめたのは太閤さん。大坂城を築き始めた頃、工事を急ぐため、働き手を増やしました。その労働者を養っていくために、住まいや食料、日用品が必要となりました。そうした商売をする人々の暮らしの場が「船場」でした。

「排水」「盛土」「運搬用水路」。元々、湿地帯だった船場の開発は一石三鳥の知恵で行われたのです。その結果、江戸時代に入ると、全国の諸大名の屋敷や蔵が集まり、掘り割りが見渡している船場には、必要な物資が日本各地から送られてきたのです。

現在、「船場エリア」を示すのは、東は東横堀川、西は西横堀川跡(阪神高速道路北回り線)、北は土佐堀川、南は長堀通(旧長堀川)の範囲です。(下図参照)



「船場」の地名は?

「船場」の由来

諸説ありますが、東横堀川などの川や堀に囲まれ、船が行き交うという漢字の通りの「船場」が、広くイメージされています。それ以外にも、大坂城の西に位置し、戦の修練をする「戦場」から転じたという説や、馬を洗う「洗馬」から転じたという説があります。

船場は、大坂城のちょうど西側にあり、堀川の水運を利用して発展しました。

大阪市街全図(大正5年)から堀川名、大坂城、エリア線を加筆
国際日本文化研究センター蔵



徳川時代からの船場

地子免除

大坂夏の陣で、豊臣方が敗れたあとの大坂は、荒廃しました。夏の陣で功をあげ、徳川家康から大坂城主に任じられた松平忠明の課題は、城下の復興と太閤びいきの市民からの支持の獲得でした。

松平忠明の最初の方策は、今でいうところの復興特区の指定、「地子免除(土地代/固定資産税のこと)」でした。これにより、大坂の商売は大変潤いました。「地子免除」については、わがまちガイドナビvol.1,5の中の「釣鐘町」大坂町中時報鐘」でも、内容を詳しくお伝えしています。



川と堀に囲まれた船場

船場へ行くには、橋を通らないと行けない

「浪華八百八橋」と言われるほど多くの橋がありました。古い船場の地図を見ると、四方に堀と川があります。つまり船場に行くには、橋を通らないといけなかったのです。それは、西横堀川が埋め立てられる昭和30年代まで続きました。

「公儀橋」と「町橋」

徳川幕府は橋の管理制度をつくり、重要な12の橋を直轄管理し、補修などには大坂金蔵から出資、これを「公儀橋」といいました。それ以外の橋は、有力な商人や近隣の町が出資し、管理されるので「町橋」といいました。

高麗橋は東海道五十三次の実事上の出発点

船場へ行くための一番重要な橋の一つ「高麗橋」は、大坂最初の鉄橋でした。江戸時代は、この橋が城下町へつなぐ重要な橋でした。高麗橋の西の橋詰に二層の屋根のやぐらがありました。監視所として、橋を渡る人々を役人に見張らせたといわれています。



高麗橋橋樑屋敷 撰津名所図会 中央市立図書館 蔵

多数の商人や文化人を育てた

人材育成の地

船場は、日本の医療や商業を発展させる人々を輩出しました。商人たちの懸命に人を育てる思いが、それを叶えたのです。

日本の7割の富が大坂に集まっていた

商都大坂の代名詞「船場」は、1700年頃、「日本の富の七分(割)は大坂にあり、大坂の富の八分(割)は今橋にあり」といわれるほどの反映を誇りました。

江戸時代、大坂城下には、全国の藩主の屋敷と蔵があり、全国の物産が一度に大坂に集まり、取り引きされていました。物産は、俵につめられていたので「俵物」と呼ばれ、その買入れは、長崎と大坂の特定の商人に限られていました。

区内に二体ある銅像「五代友厚公」

明治以降の大坂の商いを語るには、「五代友厚」を知っておきたいです。大阪証券取引所の玄関に、堂々と建っている銅像が、五代友厚像です。

彼は、海外事情をよく知り抜いていた人でした。明治維新後、大阪で官職に就き、大阪造幣寮(現・造幣局)などの設立に尽力した後、民間に転じ、紡績業・鉱業・鉄道業などを幅広く手がけました。

さらに、堂島米会所を復興するとともに、株式取引所条例の成立を受けて、自ら大阪株式取引所(現・大阪証券取引所)の発起人となり、その設立に尽力するなど、大阪の経済的基盤の構築にも熱心に取り組みました。また、大阪商法会議所(現・大阪商工会議所)を設立、日本経済における大阪の地位を著しく向上させました。

さて、この五代さん。商工会議所敷地内にも、銅像があります。それほど尊敬されていたことがわかります。(ガイドナビvol.5/大阪証券取引所HP参照)

薬のまち・道修町

わがまちガイドナビvol.1で紹介した神農さん。薬やその材料、医療に関する物資や知識が、この道修町に集まっていたのです。

昔のまま受けつがれる旧小西家住宅

国の重要文化財であり、登録有形文化財にも指定されている旧小西家住宅(現コニシ株式会社)は、堺筋と道修町の北東側にあり、ビル街の中でも昔の面影を残し、私たちの目を引きつける建物です。

明治時代に建てられた当時、家族以外の従業員は30名以上。その食事を賄う台所は大きな竈(かまど)があり、湯気や煙がこもらないよう天井が高く吹き抜けになっています。敷地内は、三階蔵や趣のある中庭もあり、昔の船場の暮らしを思い起こさせます。



中庭で小西さんから話を聞く

薬の荷物を積んだ車でこった返していた

船場を中心とした大阪のまちの昔を掘り起こし、文化を中心に考え深めていく「船場大阪を語る会」代表の三島佑一さんから、「道修町は薬問屋街。ここに医神「アスクレピオス」の像があります」と、普段通り過ぎてしまいがちな場所を紹介していただきました。

「幼い頃、薬のホコリを吸って育ちました。また大きな荷物を載せた荷馬車や肩引き車が往来し、人が通れないほどにぎわっていました」と当時の道修町の様子について、話していただきました。



「船場大阪を語る会」の三島さん

江戸時代、日本の富の7割が大坂に、その多くが船場に集まったといえます。富を集めた水運とその繁栄を支えた文化と教育。スケールの大きな船場の魅力をご紹介します。

医療や教育の最先端の場~多くの秀才を育てる

船場商人は、人材育成にも熱心でした。自分の商店の中で修行させたほか、基本的な知識を身につけるために、協力して、民間の教育施設をつくり、歴史に名だたる多くの名士を輩出しました。

愛珠幼稚園

明治13(1880)年、当時の船場北部町会で、町民たちにより設立決定。全国でも幼稚園は数が少なく、新しい試みでした。今も現役の公立幼稚園として船場の歴史を感じながら学ぶことができます。(※中央区史跡文化事典参照)



天然痘の怖さや緒方洪庵の功績を分かりやすく説明する川上さん

除痘館、緒方洪庵記念館

「古来より人々を苦しめてきた死亡率が高い感染症である天然痘予防のため、緒方洪庵らが嘉永2(1849)年に設立したが、除痘館です」と熱く語っていただいたのは、洪庵記念会の事務局長であり学芸員でもある川上さん。

18世紀末、イギリスの医師ジェンナーは、酪農家の話からヒントを得て、牛痘種痘法という天然痘に対する予防接種法を開発しました。蘭学を学ぶ中でこの方法を知った洪庵は、「ワクチンを絶やさない。お金儲けの手段にしない。」との誓いをたて、幕府公認の下、種痘活動を行いました。

懐徳堂、適塾、泊園書院

除痘館のほか、大坂の豪商たち(五同志)が設立した「懐徳堂」、福沢諭吉ら明治時代に活躍する名士を育てた「適塾」、民衆に漢字を教えた「泊園書院」があります。これらは、世の中をよくしたいという強い意志を持った民間人らによってできた教育機関で、その意志は、のちに設立された大学などにも受け継がれています。

鶴がいた!~大阪美術倶楽部(鴻池本宅)

証券会社の並ぶ北浜で、はっと目をひく「大阪美術倶楽部」の看板。この地は、両替商として富を築いた鴻池家の本宅のあった場所です。

将棋の名人戦などにも使われる和室は、細部にわたって鴻池家のごこだわりが見られます。通された和室は「扇の間の欄間の意匠や、釘隠(くぎかくし)の小さいところまで、扇のデザインが施されています。

和室、茶室、中庭を案内していただいた支配人の岡部さん。「戦前まで、中庭で鶴を飼っていました。中庭にある蹲(つくばい)は、黒く焼けこげた跡があります。これは大塩平八郎の乱の戦火を受けた跡と言われています。欄間や取っ手など、いたるところに鶴がほどこされています。



欄間や取っ手など、いたるところに鶴がほどこされています

耳寄りばなし「痘痕も醫」、読めますか?

洪庵記念会 除痘館記念資料室での川上さんの話の最後に出された質問です。「答えは、『あばたもえくぼ』。『あばた』、『痘痕』と書きます。痘痕は、痘瘡(天然痘)が治った後に残る痕(あと)という意味です。」とのこと。

大辞林によると、「痘痕も醫(あばたもえくぼ)」:恋する者の目には、相手のあばたもえくぼのように見える。ひき目で見れば、どんな欠点でも長所に見えるということのたとえ。天然痘で亡くなる人も多い中、無事助かった人でも、病中病後は痘痕が体中に残っていたことでしょう。現在では、『あばたもえくぼ』は、恋は盲目であるなどの解釈もありますが、こういった大変な事実があったことは知っておきたいことです。

おしゃれなまち「北船場」で働く、楽しむ

昔も今も働く人が行き交う船場。立派な建物は、レストランなどに活用され、楽しむまちとして発展しつつあります。

レトロビルでハイレベルな仕事を

綿業会館



事務局長の花崎さん(左端)に案内していただく

昭和3(1928)年、故 岡常夫氏(東洋紡績 専務取締役)の遺言「日本綿業の進歩発展を図るため」として100万円の寄付を受け、関係業界よりの拠出金50万円を加えた150万円を基に会館建設が決定しました。

玄関から入るとすぐ吹き抜けのホールがあります。このシャンデリアのある美の空間や、談話室、会議室、会員食堂などは、テレビ、映画の場面として使われることがあります。会員制倶楽部の建物のため、普段は入ることはできませんが、毎月第4土曜日のみ見学会(有料、要予約)を開催しています。

船場ビルディング

集英連合の大橋さんの案内で訪れた「船場ビルディング」は、荷馬車が中庭まで入ることができるように、玄関の床材が木レンガになっています。手入れされた中庭は、上部から光が入り静かで落ち着いた空間です。

今は事務所ビルとして、船場の働く人々を支えています。「屋上にはイングリッシュガーデンもありますよ。」と大橋さん。「船場の古くて良い建物は実は同じ設計者によってデザインされているものも多々あります。」と話されました。



集英連合の大橋さんに案内していただく

震災を逃れた文化財が多い

フィールドワークでは、偶然にも伏見ビルと青山ビルのオーナーさんに出会うことができ、気さくにあいさつしていただきました。ビル内にはおしゃれな喫茶やギャラリーなどが入居しており、船場の文化の高さを知ることができます。(右上に続く)

船場ことば

【だんさん、ざりよんさん・・・】

江戸時代から昭和の初めにかけて、船場には美しい格調高い「船場ことば」がありました。「丁稚(でっち)」もその一つです。その他に、【だんさん】:旦那さん。家や店の主人のこと。【ざりよんさん】:御寮さん。旦那さんの奥さんのこと。があります。また、丁稚の名前や言い回しにも特徴があります。「長吉」という丁稚の名前は「チョーキットン」「別状ないは」「ベッチョナイ」などです。

船場博覧会では、辰野ひらのまぢギャラリーで、「船場ことば劇場」が開催され、寸劇で生の船場ことばをきいてもらえるような企画がありました。

【ことばを記録して次世代に残す】

道修町3丁目にある「菜食館・門」の清水さんは、「伝統を守るなにわの会」で定期的に仲間と集い、船場ことばなど、船場文化を学び、発信する活動を行っています。「船場ことば劇場」の取組もその一つです。

「昔は、落語家さんを招いて落語会をしていました。」と清水さん。店内には、船場ことばが書かれている巻物のほか、御堂筋や歌舞伎座が描かれた大きな絵画が展示されています。

この辺りは、戦いをまめがれて、今も商業的文化的な使われ方をしている建物がたくさんあります。反対の地図面にも登録有形文化財を記号で掲載しますので、実際に足を運んでみてください。(※中央区史跡文化事典参照)

現在の楽しみどころ

船場地区HOPEゾーン協議会の活動

船場に関わる様々な人、企業、団体と船場が大好きなたくさんの人々が一緒になり、楽しみながら「まちなみ」というわかりやすい視点から、船場のまちの魅力をより高めるため活動に取り組んでいます。船場の魅力を発掘し、船場博覧会のプログラム「いま'むかし'展」では、毎年テーマを変えて、みなさんに発信しています。

■船場地区HOPEゾーン協議会
http://semba-hope.main.jp

船場博覧会

船場地区HOPEゾーン協議会や地域団体を中心となって、11月に開催されるイベント「船場博覧会」。船場の魅力をより深めるため、セミナーや建物を巡るツアー、コンサートなど、いろいろなプログラムで船場を楽しめる内容です。

なかでも、ツアーは人気が高く、オーナーの案内で巡るもの、グルメとセットのものなど様々。恒例の「吉兆お餅つき」では、船場らしい振る舞いの文化を感じます。※詳しくは上記船場地区HOPEゾーン協議会HPまで



左上/吉兆お餅つき 右上/OPENHOUSEツアー 輸出繊維会館 下/船場の木造建築展 辰野ひらのまぢギャラリー

黄色いアヒルは大人から子どもまで人気

土佐堀沿いで、突如現れた黄色いアヒル。船場、北浜の有志が集まり、ラバーダックプロジェクトとして、地域の活性化に取り組んでいます。

これらの他にも、大阪の船場を盛り上げようという活動が多くありますので、ぜひ今の船場の楽しみ方を見つけてみましょう。



船場ことばを研究し、巻物にして、情報発信



カルタでことばを伝え、「伝統を守るなにわの会」の清水さん